

Title	中国歴史文献収蔵機関情報：北京・江南・台湾
Sub Title	An information of the Chinese historical archives and libraries : Beijing, Jiangnan and Taipei
Author	山本, 英史(Yamamoto Eishi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2004
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.73, No.1 (2004. 6) ,p.69- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	史料紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20040600-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国歴史文献収蔵機関情報

— 北京・江南・台湾 —

山本英史

はじめに

本稿は最近の中国大陆と台湾における歴史文献収蔵機関の状況及びその利用法について、筆者がこの一、二年において直接赴いた北京、江南、台湾の三地区のごく一部の収蔵機関に限ってその情報をまとめたものである。

近年、主に中華民国史の若手研究者によって大陸や台湾の文献収蔵機関の情報が多く紹介されてきているが、清代以前の、いわゆる古籍の収蔵機関をも含めた情報はそれほど多くないと思われる。こうした状況を鑑み、本稿ではその部分を補うことを主眼にする。もともと、近年の中国情報はこれに限らず、社会状況と同様にすぐに変化するため、公表された時点ですでに古くなっていることを懸念するが、それでもなお多少なりとも読者の参考になり

なれば幸いである。

一 北京地区

「中国国家図書館善本特蔵閲覧室」北京市海淀区中関村南大街 <http://nlc.gov.cn/>

中国国家図書館は改めて言うまでもなく中国最大の図書館であり、最近までは「北京図書館」の名で親しまれていた（現在でもその名の方が通りやすい）。清末に創立された京師図書館はその前身にあたる。かつては北海公園の西側の文津街に本館があったが、手狭になったため、一九八三年九月に海淀区白石橋の紫竹院公園の北側に一六万平米にも及ぶ広大な新館が建てられ、三〇万冊の古籍善本はすべてこの新館に移管された。なお、これに伴い分館となった元の建物は普通本古籍を収蔵するだ



中国国家図書館（北京図書館）



元の北京図書館（現北京図書館分館）

けとなった。

図書館の正門を入って左側に迂回すると入り口がある。鞆は存包処（存包費五元）で預け、筆記用具等必要なものだけをもって入館する。最初に入り口の左側にある弁証室で「国家図書館臨時読者卡申請表」に必要事項を書き込み、カウンターに提出して「臨時読書カード」（三〇日間有効）を発行してもらわなければならない。一八歳以上であれば発行してくれるが、パスポートと工本費（五元）が必要である。カード発行の所要時間は数分程度である。その際に三桁または四桁のパスワードを問われる。OPACを使うためのパスワードであるから、これを忘れるとコンピュータ検索ができなくなる。



中国国家図書館読者カード

図書館自体の入館はこれで問題ないが、善本特蔵閲覧室への入室手続きは多少面倒である。中国国内機関の紹介状が必要である。もしそのような紹介状がない場合には国際交流処に行かなければならない。もちろ

ん国際交流処に対しては日本の機関からの紹介状があった方がよい。要するに国際交流処は中国国内機関の代理をして紹介状を発行してくれるわけである。原則的にはこの国際交流処と善本室主任の批准を必要とする。こうした手続きがすべて完了するのに小一時間かかることを思えば、可能であればあらかじめ中国国内機関から善本特蔵閲覧室への紹介状を入手しておくにこしたことはない。

善本特蔵閲覧室は二階のフロアにあり、ちょうど正面の奥に位置する。要人が来たときには正面玄関が開き、まっすぐに進めるよう設計されているが、普段は裏から迂回するため、たどり着くには少し時間がかかる。善本室の担当者は三名（いずれも女性）で、古籍を扱う性質からか、ここ数年異動がない。善本室は土、日を除く毎日開いている。開館時間は、マイクロフィルムを見る場合は九・〇〇―一六・四五、版本の場合だと九・〇〇―一六・三〇である。版本の方が返却に時間がかかるためだ。かつては二時間以上あった昼休みが現在ではなくなった。ただし、一二・〇〇―一三・〇〇は新たな閲覧申請はできない。以上の閲覧時間は七月―八月の夏は「炎熱」のためこの限りではなく、版本の種類にもかなりの

制約があることを留意しなければならない。

古籍の検索は室内のカード目録もしくは『北京図書館古籍善本目録』（縮印版）（北京・北京図書館、一九八九年）で行う。まずそれらで図書請求番号を調べ、カーボン式の二枚綴りの用紙に書き込んで受付に提出する。請求した古籍がすでにマイクロ化されている場合はマイクロを見なければならぬ。版本を見る場合は所定の席で書見台を用い、筆記用具も鉛筆に制限される。また底本費を支払わなければならない。一冊五元である。注意しなければならないのは一冊であつて一帙ではないことである。

写真焼き付け複写をする場合には、宋元版であれば一枚一五〇―六〇元、清版で六〇―一五元が必要である。決して安いとはいえないため時間のない場合以外はひたすら筆写するのが賢明である。

昼食は館内に食堂があり、簡単なランチや小吃を供している。また、入り口の前に新しく快餐ができた。自分でカップ麺を購入して食べることもできる。外で食事をする場合には、図書館の向かいに奧林匹克飯店があり、そのレストランが便利である。

（二〇〇三年十一月現在）

II 【中国第一歴史档案館】北京市西城区西華門大街

中国第一歴史档案館は特に明清時代の王朝行政に関わる原文書を集的に収蔵しており、明清時代の根本史料の「宝庫」といつてよい。その歴史は古く、一九二五年一〇月に故宮博物院が正式に成立した時に始まる。中華人民共和国成立後は、中央档案館の一部として明清档案部と呼ばれる時もあったが、一九八〇年四月、国家档案局が接収し、正式に「中国第一歴史档案館」として発足した。ちなみに「中国第二歴史档案館」は南京にあり、中華民国時代の中央档案を収蔵する。

中国第一歴史档案館の収蔵档案は七四全宗一千余万件に及ぶといわれる。明代のものは約三千件と比較的少ない。その大部分が、「内閣档案」「軍機処档案」「宮中各処档案」「六部档案」などと呼ばれる清代の中央国家机关の行政文書である。また、皇族関係の档案や「順天府档案」等一部の地方行政機関文書を含んでいる。

建物は故宮の敷地内にあり、その西門に当たる西華門から入る。西華門には門衛がいて入館者をチェックする。第一歴史档案館に行くと言えば、たいてい問題なく入れてくれるが、ときに目的を尋ねられることもある。「これまでに来たことがある」という事実がなぜか重要であ



中国第一歴史档案馆

る。

開館時間は土日を除く毎日八…〇〇—一六…〇〇であり、昼休み休憩は現在なくなった（ただし、金曜日は一五…〇〇で閉館）。七—八月の夏季は、「炎熱」のため、月—金はともに一四…〇〇で閉館になる。まず、入り口で靴を預け、受付で登録する。外国人はパスポートだけで十分であるが、やはり国内機関の紹介状はあった方がよい。ただし、館内に知人がいる場合はこの限りではない。初めての場合は来館の目的、日本での所属と身分、研究テーマなどを詳しく記した書類の提出が求められる。

檔案の検索は館内に備え付けられた目録で行う。以前はこうした目録の閲覧は職員に限られていたため、閲覧者は自分の研究テーマもしくは閲覧希望の内容を係員に報告し、その係員がそれに該当すると思う檔案を自分で判断してもつてくるというのが一般的であった。それに比べれば、ずいぶん便利にはなったが、もしわからなければ、係員に尋ねるのが今でも一番よい方法である。また、まだ一般公開されていない目録も存在する。目録室は入り口右手に移され、改装されて立派になった。ただ目録は館内備え付けの冊子のみで、電腦化はいまのところ進んでいない。冊子になった目録は膨大な数になる。

清代の軍機処録副とよばれる行政文書などは地域別、年代別、上奏者別のそれぞれの目録がある。これなど電腦にデータを打ち込めばそれで済むと思えるのだが。結局、中国第一歴史檔案館は現在の時点では大変動は当分期待できないということか。

檔案の閲覧は右手奥の閲覧室で行う。現物を閲覧する部屋とマイクロフィルムを閲覧する部屋に分かれる。現物を閲覧する部屋では書写には鉛筆使用が原則になっている。マイクロフィルムによる複写を請求することができる。マイクロフィルム一件で二・五元の費用がかかる。

欠点の第一は一度にあまり多くの件数を請求できないことである。百件を超えると拒否されることが多く、書写を求められることがある。第二は受け渡しに郵送がきかないことである。依頼者は必ず来館し、現金と交換しなければならぬ。出来上がりには約二週間を要するので、それまで北京に滞在できない短期訪問者の場合は、留学生か誰かに代理人を依頼する以外には方法がない。

なお、中国第一歴史檔案館では館内収蔵の檔案を影印した洋装本史料を多く刊行しており、館内でも販売している。自分がいま収集している檔案が近い将来において出版する予定があるかどうかを係員に確認しておいた方

が貴重な時間をロスしなくてよい。

昼食は館内の休憩室にカップ麺やパンなどの食料を持ち込むのが時間の節約になる。もう少しまとものものが食べたいと思えば、いったん西華門を出ると、いくつか食堂がある。澤園酒家や龍爪居など有名なレストランでゆっくり食事することもできる。

中国第一歴史檔案館については、中国第一歴史檔案館編『中国第一歴史檔案館藏檔案概述』（北京・檔案出版社、一九八五年）や秦國経『中華明清珍檔指南』（北京・人民出版社、一九九四年、二六―一二七頁）に紹介がある。

（二〇〇三年一月現在）

III 【中国科学院文献情報中心】北京市中関村北四環西路
<http://www.ias.ac.cn/>

中国科学院は民国時代の中央研究院を接收し、郭沫若を初代院長として一九四九年一月に創設された中華人民共和国の科学アカデミーであり、当初は物理・数学・化学、生物・地学、技術化学、哲学・社会科学の四部門が設けられたが、一九七七年に哲学・社会科学が中国社会科学院として独立したため、自然科学の研究機関とし



中国科学院文献信息中心

ての性格を強めた。

科学院図書館はその所属機関のひとつであり、文科と理科が統一されていたときの中国科学院がもっていた蔵書を多く保管している。古籍の目録として『中国科学院图书馆藏中文古籍善本书目』（北京・科学出版社、一九九五年）がある。

本来は王府井北大街にあったが、一九九七年九月に友谊宾馆（海淀区白颐路三号）の北門向かいに移った。しかし、ここは「中国遥感衛星地面站（遠隔探查衛星地上基地）」というふうに見ても古籍とは無関係の敷地内にあるので違和感を隠せなかったが、やはりここも仮住まいであり、二〇〇二年六月に正式に中関村に移転した。科学院図書館の中関村移転話はなんと一九九五年以前からあったが、やっとして実現したことになる。

ここでは「中国科学院文献信息中心」と名前を変え、巨大なビルの五階に古籍善本書室が置かれることになった。開館時間は土日を除く毎日九・〇〇—一七・〇〇（夏季）、八・三〇—一七・〇〇（冬季）で、昼休みはない。収費として一種につき明版本一五元、抄本二〇元、稿本二五元をはじめとする金額を支払わねばならない。

中国国内機関の紹介状が必要である。門衛には用件を

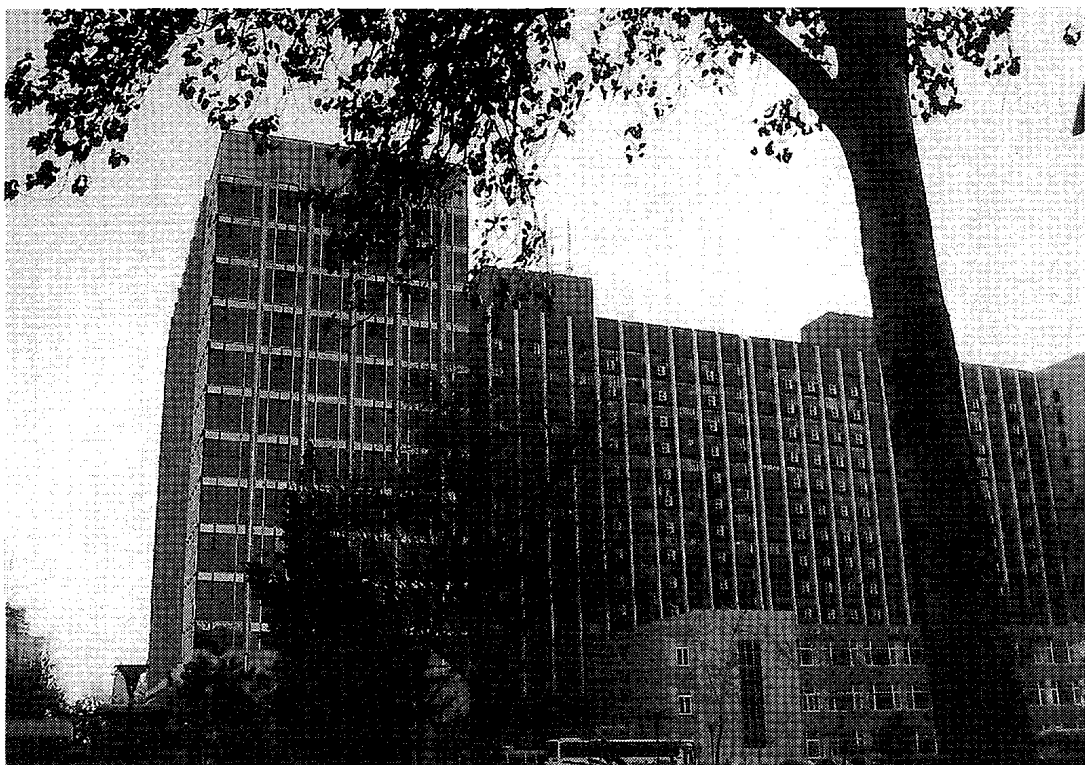
判りやすく伝え、信息服务部に連絡を取るように頼むと手続きが早い。なお、この建物の周辺には昼食を取れそうな場所はほとんどない。

(二〇〇三年十一月現在)

Ⅳ【中国社会科学院文献信息中心古籍善本室】北京市东城区建国門内南大街 <http://www.cendi.css.org.cn/>

中国社会科学院は一九七七年に中国科学院から哲学社会科学学部が分離独立して生まれた国务院直属の研究機関である。三〇を超える人文科学系の研究所のうちの歴史研究所は中国の歴史(近代史は近代史研究所の管轄)を中心に各研究室を持ち、以前は朝陽区建国門外の国際大厦に収まっていた。古籍は建国後に買い集めただけに、さほど多くはないが、なかには族譜など貴重なものがあった。とりわけ八階の叢書部にある書庫の一室には著名な明清史研究者であった謝国楨氏の蔵書が収められていた。一九九六年、ビルの権利売却に伴い研究所は建国門内の本部の敷地内に移され、しばしの仮住まいのあと、二〇〇二年に新築の高層ビルの中に再移転して、現在に至っている。

中国社会科学院は国家の重要な機関だけあって、管理



中国社会科学院文献信息中心

もまた嚴重である。まず中央入り口右側にある外来登記所において会客登記單に必要事項を記入させられる。その際、訪問目的とともに、誰に会いに来たのが問われる。院内に知人がいれば、その人に電話で連絡をして確認し、その後に許可証を発行してくれる。知人のいない場合は多少厄介であるが、古籍を閲覧したい旨を告げれば、担当者に連絡してくれることもある。その際には中国国内の研究機関による紹介状があった方がよい。かくて、第一関門を突破して、図書館のあるビルに行くことができる。

会 客 登 記 単

来訪時間	11月20日	上午	10時	分
来客姓名	小澤実史	性別	男	
工作单位 或详细地址	清华大学			
与被访人关系	朋友	人数	1	
被访人姓名	王明	单位	南大	
来客离开时间		时	分	被访人 签名

建物の各階に研究室があり、一二階に古籍善本室が設けられている。古籍善本室の閲覧は土日月を除く毎日八三〇、一三・三〇—一六・〇〇。カード目録による検索はできるが、閲覧室は書庫をも兼ねており、一部は直接存在を確認することができる。担当者に請求して出してもらうシステムである。紹介状はあった方がよい。

歴史研究所はまた徽州文書のコレクションで有名なところであるが、周紹泉教授の死去や變成顕教授の退職に伴って徽学研究中心がなくなってしまったのは大変惜しまれる。一日も早く後継者が育つことを願ってやまない。

(二〇〇三年一月現在)

V【中国社会科学院法学研究所法学图书馆】北京市东城区沙滩北街 <http://www.cass.net.cn/chinese/s07.fxsl>
s07.fxsl.htm

同じく中国社会科学院の発足以来の研究所以としての歴史を持つ法学研究所にもまた法律・裁判関係の古籍を多く所蔵している。日本でこの分野の一大コレクションとして東京大学東洋文化研究所の大木文庫が有名であるが、それよりもはるかに多くの書籍を擁している。建国後に集めたものではあるが、当時まだ多くの古籍が市場に回っていたことを物語る。

一九九五年に新しいビルが建ち、施設面では一新されたが、あまり管理が厳しくない。善本が少ないせいも、古籍の閲覧も他所に比べておろかだったことが印象的だった。

今回は八年ぶりの再訪問であった。施設面では一層整



中国社会科学院法学研究所

カード目録はなぜか書庫の中にあり（書庫の中に入れてくれるのであるが）、古籍は民国前書名片と民国前作者片の各二箱で検索できる。また、分類片で項目別に検索することも可能である。ただし、直接地下の書架に行って見たいといえ、多分許可してくれるものと判断した。八年前に世話になった美貌の女性係員が筆者の顔を覚えていてくれていたことも成果としては極めて大きかった。

（二〇〇三年十一月現在）

VI【北京大学図書館古籍善本閲覧室】北京市海淀区海澱路 <http://www.lib.pku.edu.cn/>

備され、法学図書館が新たに設けられて一般の利用に供するようになっていた。紹介状を持たずに赴いたにもかかわらず、館員に古籍を閲覧したい旨を告げると、なんら問題なく許可してくれた。法学図書館は法律一般の図書館であって、古籍の利用者は少ないらしい。地下の書庫には昔のままに古籍が収まっていた。書架が木製からステール製に変わったのが「近代化」といえないこともない。

法学図書館の閲覧時間は月水木金が八・三〇―一六・三〇、火は八・三〇―一七・〇〇と定められている。

北京市西北の海淀区にある北京大学は中国を代表する総合大学として知られ、多くの著名人を輩出してきた。その前身は清末戊戌变法改革によって設立された京師大学堂であり、その図書館は一九〇二年に建てられた京師大学堂蔵書楼に始まる。辛亥革命後、北京大学図書館と改名、毛沢東も一時期図書館員として勤務したことがある。一九五二年、北京大学図書館は北京大学が燕京大学跡に移転するに伴い燕京大学の蔵書を吸収して大規模な図書館となった。一九九八年の創立百年を記念して図書館も新しく建てかえられ、善本閲覧室もまた工具書が充



北京大学図書館

実し、旧燕京大学所蔵や旧北京大学所蔵の古籍もみなここに一括された。現在古籍は一五〇万冊、うち善本一七万冊にのぼる。

開館時間は現在、土日を除く毎日で、昨年の夏では七月二日―八月三〇日は八・〇〇―一・〇〇〇のみ、九月二日―九月六日は八・〇〇―一・四五と一四・〇〇―一七・〇〇、九月九日以降は一四・〇〇―一七・〇〇と細かく規定されていた。二〇〇三年十一月の時点では八・〇〇―一・五〇、一四・〇〇―一七・三〇となっている。夏場は閲覧時間のみならず、古籍は乾隆以降の地方志のみといったような制限があつて、極めて不便である。

閲覧手続については中国国内機関の紹介状が必要となるが、一日だけであれば、パスポートだけで許可されることもある。いずれにせよ、パスポートを受付に預け、閲覧証と交換して入館する。

すでに整備された目録である『北京大学図書館蔵古籍善本書目』（北京・北京大学出版社、一九九九年）が刊行されており、検索もこれによるのが便利であるが、館内に備え付けられたカード目録も利用することができる。カード目録には燕大目録、北大目録、善本特蔵目録、西

文善本目録、地方志目録の五つがある。

古籍を複写する場合は、宋元版では四〇―二八元、明嘉靖以前の版では二八―一二元、一般善本では六元、普通古籍では五―一二元と規定されている。

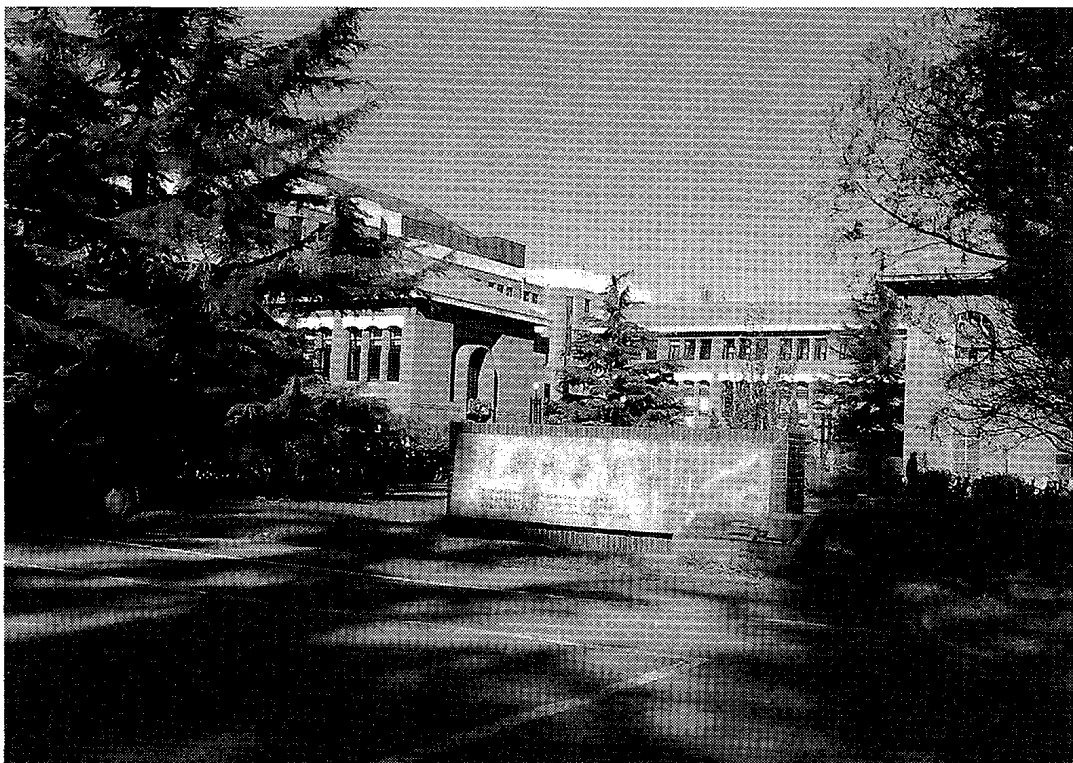
(二〇〇三年十一月現在)

VII【清華大学図書館古籍閲覧室】北京市海淀区清華園

<http://www.lib.tsinghua.edu.cn/>

清華大学はその前身である清華学堂が一九一一年にアメリカによって義和団賠償金の一部で設立され、辛亥革命後の一二年に清華学校と改名、二五年に四年制大学となり、二八年国民政府下で国立清華大学となった中国有数の伝統校である。文化大革命の混乱を経た七八年に再編成され、現在はとりわけ理工系のトップエリート大学として発展している。

図書館は一九一二年の清華学校発足とともに設立された。現在の建物は九一年に香港の邵逸夫氏の義捐金で整備されたもので、その名にちなんで「逸夫館」と称せられている。本来は文系も充実していたため、古籍も比較的多く所蔵し、二万八〇〇〇種三〇万冊に及ぶ。善本については、近年刊行された清華大学図書館編『清華大学



清華大学図書館

『図書館蔵善本書目』（北京・清华大学出版社、二〇〇三年）によって知ることができる。なお、『中国古籍善本書目』（上海・上海古籍出版社、一九九三年）には清华大学所蔵の善本として一八八五種が挙げられているが、本書には四六二三種が挙げられている。いろいろな事情があるのだろうが、『中国古籍善本書目』に収録されていないものはかなりの数にのぼる。

古籍閲覧室は新館西にあり、土日を除く毎日の八・〇〇—一二・〇〇、一四・〇〇—一七・三〇に開かれている。収費は善本で毎函二—五元、普通本で一元、複写費は善本で毎頁八—一五元、普通本で二元である。

紹介状は図書館に入る際に提出が求められる、古籍閲覧室でもさらに必要になるから、あった方がよい。来訪者の過去のリストを見ると、清华大学内の文科系研究者の利用以外はほとんどないようだ。ただ、目録が刊行されたため、今後外部利用者は多くなるであろうし、管理も厳しくなることが予想される。

（二〇〇三年十一月現在）

VIII【北京師範大学図書館古籍書庫閲覧室】北京市海淀区学院南路 <http://www.lib.bnu.edu.cn/>

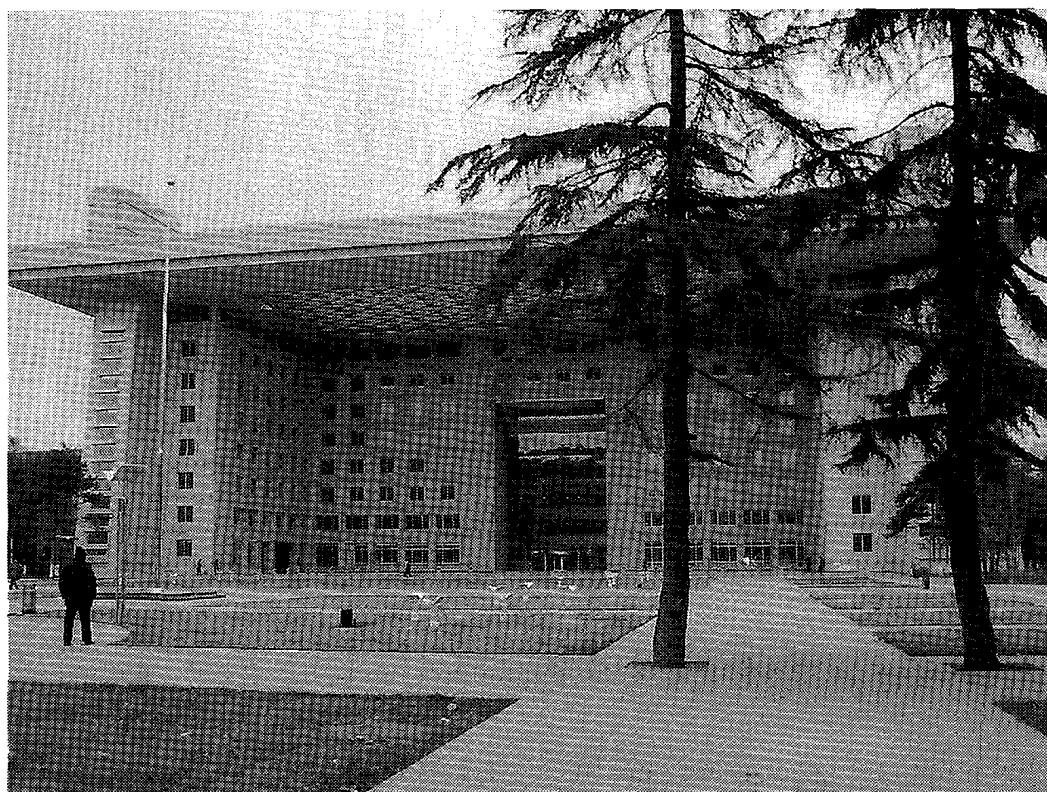
北京師範大学は一九〇二年に創立された京師大学堂師範館を前身とする伝統ある教員養成大学であり、それに附属した図書館は善本三〇〇〇種と、古籍を比較的多く所蔵している。目録として『北京師範大学図書館中文古籍書目』（北京・北京師範大学図書館編輯出版、一九八三年）が刊行されている。

以前の図書館は古ぼけていたが、二〇〇二年に創立百年を記念して新しく巨大なビルに変身した。古籍書庫閲覧室はその二階にあり、土日を除く毎日の八・一〇—一・三〇、一四・〇〇—一七・一五、土の八・一〇—一・三〇に開いている。収費は一冊につき五元求められる。

紹介状を持っていかなかったが、弁公室で手続きして、その書類を閲覧室に持参すれば全く問題はなかった。まだ外側の器ができたばかりで、中身の整備が整っていないのが現状なのであろう。

（二〇〇三年十一月現在）

北京ではこのほかに中国社会科学院近代史研究所図書



北京師範大学図書館

館（東城区東廠胡同）や経済研究所図書館（西城区北小街）に比較的多くの古籍がある。前者はアヘン戦争以後の文献を多く所蔵しており、後者は経済関係の図書を多く集めているが、ともに善本古籍は少ない。ただ、近年の状況については十分理解していないので、ここでは多くを紹介しない。

なお、故宮博物院にもかなり貴重な古籍が所蔵されているはずであるが、内部図書館など一般の外国人に開放されていないものも多いと聞く。

二 江南地区

Ⅰ【上海図書館古籍閲覧室】上海市徐匯区淮海中路
<http://www.library.sh.cn/>

上海図書館は中国有数の規模を誇る公共図書館としてつとに有名である。古籍に限っていえば、蔵書数は一七〇万冊にのぼり、うち善本二万五〇〇〇種、一七万八〇〇〇冊を所蔵する。また、五四〇〇種の地方志や八〇〇〇種の清代朱卷など、特色ある蔵書が多い。

新しい上海図書館についてはすでに多くの人が利用しており、いまさら改めて言うことはあまりないが、とにかく以前と比べて画期的に変わった。どこが画期的かと



旧上海図書館



上海図書館



いうと、古籍善本が容易に見られるようになったことである。上海図書館が人民公園内にあった七、八年前だところはいかなかった。図書館員はどういった本が見たいのかと必ず尋ねる。こちらはこういった本があるのかわからないのでカード目録を見せてくれと頼むが、それはできないという。で、何の本が見たいのかと図書館員は再び尋ねる。こういった禅問答を繰り返すうちに時間は刻々過ぎていった。それがいまや古籍もカード目録が整備され、検索が容易になったばかりか、貴重書も電腦を使って印刷可能になったのだから、まさしく「改革開放」である。一番の驚きは手続の早さである。入口付近

の手続所でパスポートと手数料一〇元を出せば一カ月有効の閲覧証をすぐに発行してくれる。鞆は存包処（入口左）に預ける。一元入れると、空いているロッカーを機械が指示し、取り出すときに必要なパスワードを記した紙片が出てくる。

古籍閲覧室は二階にあり、

開館時間は日曜を除く毎日八・三〇―一七・〇〇（昼休みなし）である。古籍の検索にはカード目録が便利であり、書名、著者、分類がそろっている。また、善本と普通本の区別がある。印刷された目録に『上海図書館善本書目』（一九五七年）があるが、最近の情報を盛り込んだものはない。古籍の閲覧方法は、単子に必要事項を記入の上、係官に提出し、閲覧証と交換に金属板を受領する。閲覧室で閲覧（鉛筆の指定なし）する。CD-ROMの場合は別室で閲覧する。

（二〇〇二年九月現在）

II 【復旦大学図書館古籍特蔵室】 上海市邯鄲路 www.library.fudan.edu.cn/

復旦大学は北京大学と肩を並べる教育部直轄の国立文理系総合大学で、その前身は馬相伯が一九〇五年に創設した復旦公学である。「復旦」とは「光復震旦（中国の回復）」という民族意識に由来する。

付設する図書館の三階に古籍特蔵室がある。蔵書数は四万二〇〇〇冊（うち善本七〇〇〇冊を含む）に及ぶ。数としては他に比べてさほど突出したものではないが、この図書館にしかない珍しい江南関係図書がしばしば見



復旦大学図書館

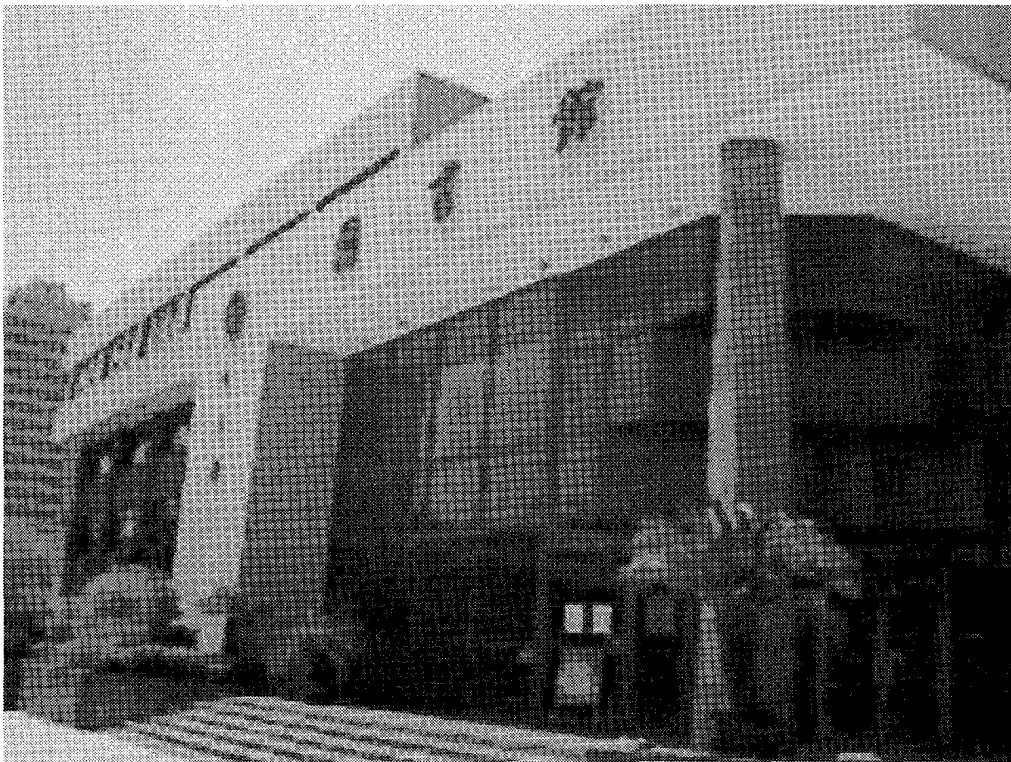
つかる。開館時間は土日を除く毎日の八…〇〇—一一…三〇と一三…三〇—一七…〇〇である。中国国内機関の紹介状が必要となる。入館の際に古籍特蔵室に行くことを係員に報告すれば入館は可能となる。閲覧室で鞆を預け、閲覧証とパスポートを交換する。検索方法としては館内備え付けの冊子目録（『復旦大学図書館古籍簡目初稿』一九五六年）とカード目録とがある。单子に必要事項を記入した上で、閲覧担当者に図書を請求する。筆写の際に鉛筆を使わなければならないという指定は特にない。

（二〇〇二年九月現在）

Ⅲ 【華東師範大学図書館古籍閲覧室】 上海市中山北路

<http://www.lib.ecnu.edu.cn/>

華東師範大学は北京師範大学と並ぶ教育系総合大学で、一九五一年の創設にかかる。その図書館の逸夫楼八階の古籍閲覧室には線装本三一万冊があり、地方志や清代文集など貴重なもの収められている。目録はなく、検索は備え付けのカード目録で行う。外国人の場合、外事弁公室で許可を得たのち、図書館の弁公室で再び許可を得、しかる後に初めて古籍の受付にたどり着けるという、旧来の慣行を踏襲しているため、時間のないときにちよつ



華東師範大学図書館

と立ち寄るといった閲覧のやり方はほとんど不可能に近い。閲覧時間は土日を除く毎日八・三〇—一一・三〇、一三・二〇—一七・〇〇（ただし、水は午前のみ開館）である。

（二〇〇三年二月現在）

Ⅳ【南京図書館歴史文献部（古籍部）】南京市虎踞路

<http://www.njlib.jloine.com>

南京図書館は一九〇七年に創立された江南図書館に起源を持ち、民国時代に江蘇省立国学図書館と改名、一九五四年に南京図書館となり、現在に至っている。二〇〇一年より、古籍は歴史文献部で一括して閲覧できるようになった。本館は成賢街に別に存在するため、間違っで行かないように注意する必要がある。

開館時間は土日を除く毎日の八・〇〇—一七・〇〇で昼休みはない。中国国内機関の紹介状が必要となる。まず閲覧室で鞆を預け、閲覧証とパスポートを交換する。検索方法としては書名と著者のカード目録があり、分類は電腦に入力されている。図書請求は索書単に二部同じことを記入する。一回二種までを請求できる。複写は一冊につき三分の一を越えてはならない。



南京図書館歴史文献部（古籍部）

なお、高田幸男「中国近現代文書へのアクセス」(『歴史評論』六三八号、二〇〇三年)は二〇〇一年時点での本館の情報を提供している。

(二〇〇二年九月現在)

V【南京大学図書館古籍閲覧室】 南京市漢口路号南大

構内西楼 <http://www.202119473/>

南京大学は教育部直轄の総合大学で、一九〇二年に張之洞が創設した三江師範学堂が前身である。一九四九年の新中国成立後、現在の名称となる。この大学も創立百年を迎え、多くの建物が新しくなった。

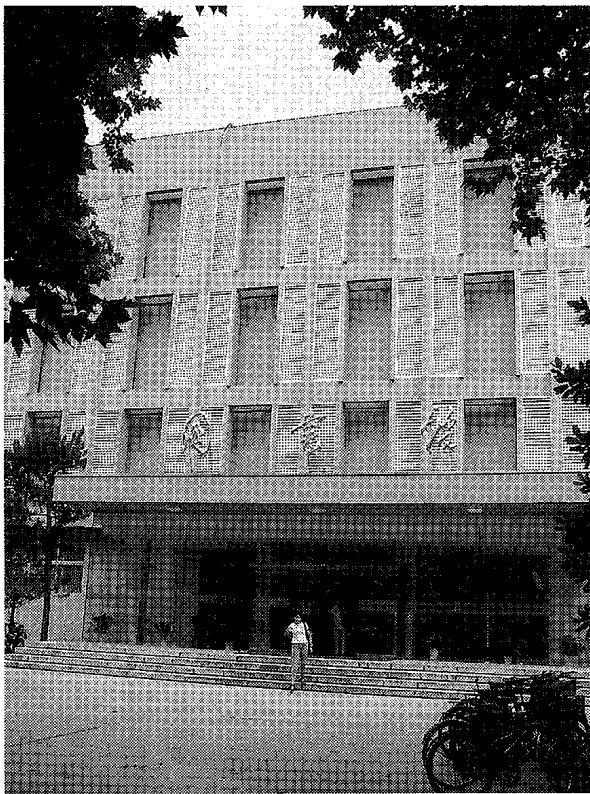
図書館はその構内にあり、三江師範学堂徳書楼として発足し、一九七九年に新館が建てられた。古籍閲覧室の開館時間は土日および水の午後を除く毎日八・〇〇—二・〇〇、一四・〇〇—一七・三〇で、閲覧手続には中国国内機関の紹介状を必要とする。最初の入館方法としては、何らかの身分証を閲覧証と交換する必要がある。検索は今のところ少し古いものだが『南京大学図書館中文旧籍分類目録初稿』(南京大学、一九五八年)しかない。閲覧は一回二種、毎冊一元の収費を取られる。複写は書籍の三分の一を限度とし、民国一元、咸豐三元、道

光四元、嘉慶五元、崇禎—乾隆一〇元、崇禎以前は協議、といった規定が存在する。

(二〇〇二年九月現在)

VI【江蘇省檔案館】 南京市青島路 <http://www.archivesjs.gov.cn/>

江蘇省檔案館は南京大学の近くにある白亜の立派な外観の資料館である。情報公開の結果、民国から解放以後文革前までの檔案を一般に公開している。同じ南京にある中国第二歴史檔案館が国民党系の中央政府文書である



南京大学図書館



江蘇省檔案館

きわめて無謀である。ただ、一つの事件を追って、事件当日の档案が存在するか、存在するなら何が書かれているかといった方向で档案を見る場合は有効であるかもしれない。

それにしてもこうした膨大な原文書が次々に公開されることは民国史や共産党史が画期的に塗りかえられる可能性を持つことになろうが、汗牛は汗をかきすぎて肺炎になってしまいう可能性もなしとはしない。

なお、高田前掲論文は当館の二〇〇一年現在の情報を提供している。

（二〇〇二年九月現在）

のに対し、こちらは省単位の地方文書を収める。数年前は外国人の立ち入りも許されなかったところだが、いまや『江蘇省档案館指南』（北京・档案出版社、一九九四年）といったものが出版されるまでに至っている。

閲覧手続には中国国内機関の紹介状を必要とする。入館は閲覧証とパスポートとの交換で実現する。閲覧時間は土日を除く毎日八・三〇—一・三〇と一四・〇〇—一七・〇〇である。文献検索はカード目録にて行うが、カード目録に記された情報はあまり多くない。档案を片端から見ようとするのは素手で大海に泳ぎ出すに似て、

VII【浙江大学図書館線装善本閲覧室】杭州市西溪 <http://www.libweb.zju.edu.cn/>

浙江大学は一八九七年に開設された求是学院に始まり、一九二八年に今の名称となった。本来理工系の重点大学であったが、最近、省直轄の杭州大学と合併して、より大規模な総合大学に組織替えされた。

その図書館は本館と分館に分かれ、古籍部は西溪地区の文理分館に属し、基本的に旧杭州大学図書館をそのまま継承している。線装本一二万冊、うち善本一三五〇種



浙江大学図書館

一万九〇〇〇冊を含む、その状況は『杭州大学図書館線装書総目』（中華書局、一九六四年十二月）や『杭州大学図書館善本書目』（中華書局、一九六五年七月）といった謄写版印刷の目録で知ることができる。現在、図書はカードで十進法分類がなされているが、これは中国の古籍の検索にはきわめて不便であるため、いきおい旧目録に頼ることになる。開館時間は月々木が八・〇〇―一・三〇、一三・三〇―一七・〇〇、金が八・〇〇―一・三〇である。

（二〇〇三年二月現在）

VIII 【浙江図書館古籍部】 杭州市西湖区孤山路 <http://www.zlib.net.cn/default.asp>

浙江図書館は古籍部だけが西湖に浮かぶ自然にできた島である孤島に独立している。孤島の中には篆刻研究で有名な西泠印社、中山公園、浙江博物館などがある。中に入るとすぐ書庫につながる大きな階段があり、アールデコ調の雰囲気を作っている。入り口に置かれた目録カードは新しく分類されたものらしく、使い勝手が悪い。『浙江図書館善本書目』四卷（一九三七年排印本一冊）

という四庫分類の目録があるが、これは恐ろしく古い。

もう一つの『浙江図書館特蔵書目』甲編・乙編（刊年不詳）がまだよい。開館時間は土日を除く毎日九・〇〇―一六・三〇で昼休みはない。民国期の文献であれば、一枚一・五元でコピーできる（全部の場合は一枚二・五元になる）。なお、浙江図書館新館にも古籍善本閲覧室があるようだが、確認はしていない。

当館については川島真「浙江省檔案館・図書館、湖北省檔案館訪問報告」（『中国研究月報』五一巻二号〔五八八号〕、一九九七年）に一九九七年時点での詳しい紹介がある。

（二〇〇三年二月現在）

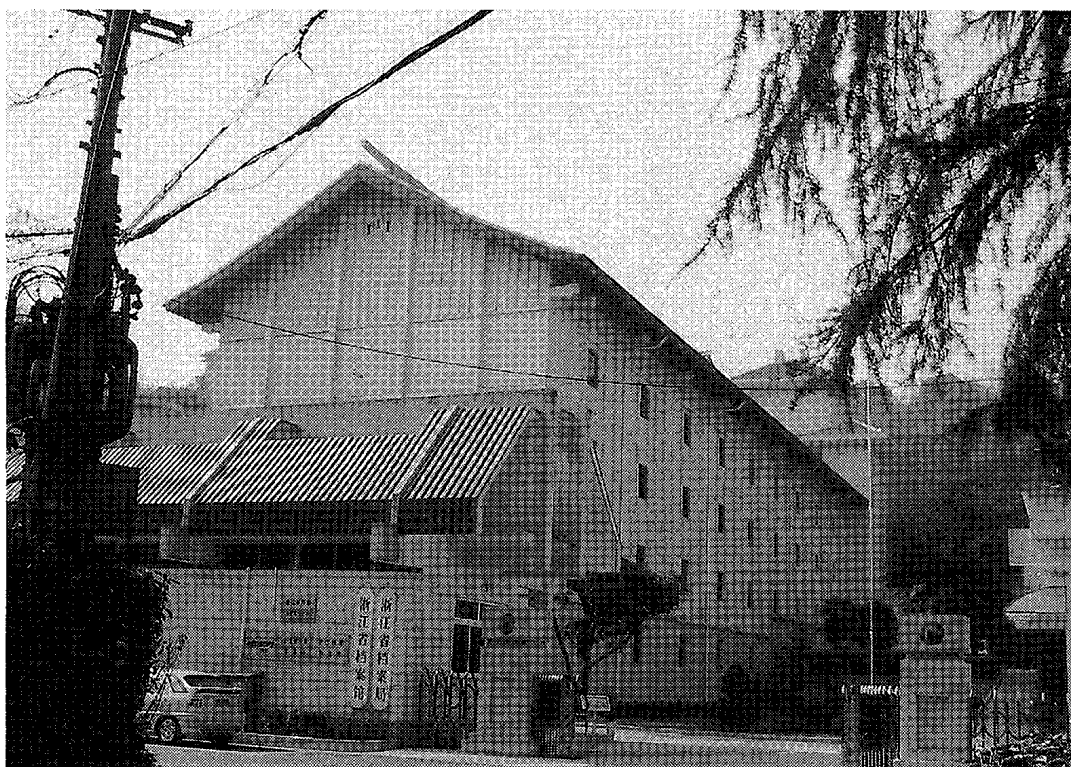


浙江省図書館古籍部

IX 【浙江省档案館】 杭州市曙光路 <http://www.zjda.gov.cn/>

浙江省档案館は一九六五年に創立されたものの、他の機関と同様、文革の影響で開店休業となり、一九八〇年代になってやっと本格的な活動を始めたという。現在の建物は一九八二年に落成したものである。収蔵档案は清末の咸豊八年（一八五八）からの寧波、温州、杭州の海関档案や慈善機関の同善堂関係のもの若干を除けば、国民政府時期と中華人民共和国時期のものが圧倒的な比重を占める。档案館は研究のための史料館というよりは現在の行政に資する情報提供機関としての役割が大きく、政府の肝煎で整備が奨励されたせいか、建物や設備は素晴らしいが、まだ利用には十分機能していないように感じる。もつとも膨大な数のカード目録をパラパラ見ただけではどこから手をつけていいのか、という気持ちになるのだが。日本人の利用者もまだあまり来ていないようだ。詳しくは、浙江省档案館編『浙江省档案館指南』（杭州・杭州大学出版社、一九九七年）を参照されたい。当館についても川島前掲論文に一九九七年時点での詳しい紹介がある。

（二〇〇三年二月現在）



浙江省档案馆

X 【紹興図書館】紹興市延安路 <http://library.sx.zj.cn/>
紹興図書館は紹興市の図書館である。行ってみて驚いたことに、市の図書館にしてはすいぶん立派な建物であった。二〇〇〇年を機に魯迅紀年館に付設していた魯迅図書館から蔵書を移管してきたとかで、古籍は一六万冊、うち七百余の善本を含み、紹興関係のものとうそでないものが区別されている分類カードがある。また、館内には魯迅図書館が編集した手書きの四部分類目録がある。館員の女性たちはとても感じがよく、知性的であった。こうした地方図書館は改築して立派になったのはよいが利用者はさほど多くなく、館員たちは普段暇なため外国人客が来ると歓待するといったこともその一因なのであろう。紹興図書館には古籍はあまりなかったものの、貴重な成果が得られた次第である。古籍部の開館時間は日月を除く毎日九・〇〇—一一・三〇と一三・三〇—一七・〇〇である。

(二〇〇三年二月現在)

XI 【紹興県档案馆】紹興市越城区延安路

<http://www.sxda.ov.cn/sxxdaj/documents/doc.asp>

紹興市関係の檔案はここに一括されている。県政府の



紹興圖書館



紹興縣檔案館

敷地内にある。ちょっと外国人が気安く入れる雰囲気はしないが、浙江大学の紹介状により、案外簡単に入ることができた。档案馆といっても別段閲覧室が完備されているわけではなく、皆が仕事している弁公室の隣で目録を見ることがになる。それでも、「民国開放档案分類カード」や「現行機関開放档案分類カード」は充実しており、『民国档案開放目録』全四冊は一九一〇—一九四〇年代の紹興の細密史料で満ち溢れている。本格的にここで史料を読むにはかなりの準備運動が必要であり、この海にいきなり飛び込むと心臓麻痺を起こしかねない。

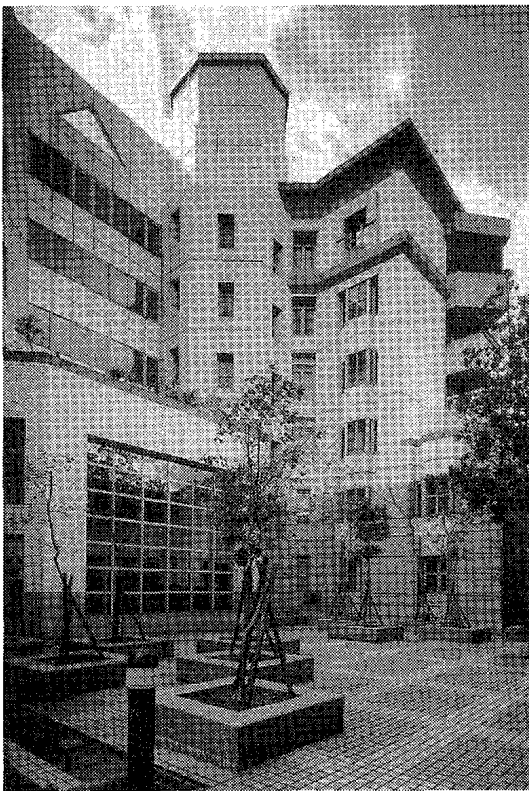
(二〇〇三年二月現在)

三 台湾地区

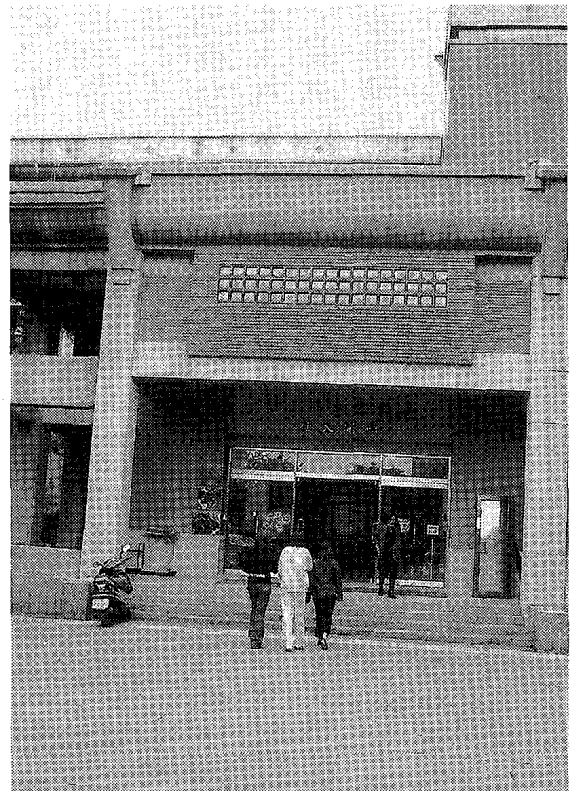
一【国立中央研究院】台北市南港区研究院路 <http://www.sinica.edu.tw/>

国立中央研究院は理系・文系を併せた国立の総合研究所である。元来大陸にあった組織が台湾に移ってきたもので、その広大な敷地と規模に圧倒される。歴史関係では近代史研究所、歴史語言研究所、台湾史研究所などがそれぞれ独立した組織と建物を持っている。

歴史語言研究所の傅斯年圖書館、近代史研究所の郭廷



中央研究院近代史研究所



中央研究院歷史語言研究所



傳斯年圖書館

以図書館には内外の図書や工具類が充実している。大陸出版物はほとんどそろっているといつてよい。以前は香港や日本の書店を通じていたが現在は直接大陸から購入するという。日本では値段が高いためにおいそれとは見かけない『四庫全書存目叢書』などの大規模叢書があちこちにある。また、大陸でしか見ることのできない史料をマイクロフィルムでコピーしたものもかなりの量が見られる。なかでも庄卷は王鈺欣・周紹泉主編『徽州千年契約文書』全二編（石家莊・花山文芸出版社、一九九一年）に収められていない北京の社会科学学院歴史研究所蔵

の徽州文書の原物大の膨大なコピーである。さすがに徽州文書を専門に利用する人は台湾ではまだ少ないが、「お宝」であることは間違いない。

ところで、中央研究院の特徴の一つとして漢籍電子文献資料庫のことについて触れておかねばならない。一九九七年から始められた計画はその後漸次発展し、今では院内の各研究所がいろいろなものを競い合って資料庫を作っている状況である。なかでも歴史語言研究所では『二十五史』（三九九六万九五三三字）、『十三經』（八六万三一六字）がすでに完成し、加えて漢籍全文資料計画が進行中という。対象とする漢籍は『資治通鑑』や『十通』等、比較的古い時代のものから始められたが、研究所の世代交代が進んだ結果、明清のものが中心になってきたという。『明実録』（一五三一萬三〇三九字）はほぼ完成し、館内では検索が自由にできる。何かキーワードを入れると、その語が含まれる該当箇所全文が一括して現われる。こうしたことをやるためには一三三冊もある印刷本を片端から見てもいかねばならなかった今までのやり方からすれば画期的なものである。しかもさらに驚くべきは、この『明実録』の優に二倍半はある『清実録』も入力がまもなく完成するという。

歴史語言研究所にはもうひとつ有名な明清檔案館がある。ここはかつて北京の紫禁城内の内閣大庫が所蔵し、戦後の一九四九年に国民政府の軍艦で台湾に搬入された膨大な文書を収めた文書館である。歴史語言研究所はもと一九二八年に大陸で設立された研究所であり、膨大な文書の整理を行っていた。台北の研究所はその事業を継承し、近年それを本格的に整理しただけでなく、電脳によるデータ処理を行い、検索をきわめて容易にした。内閣大庫の檔案は題本と呼ばれる上奏文が多くを占め、しかも清初の記事が重要である。例えば一人の人物名で検索をかけたとき。本人が上奏した文だけでなく、他人がその人物に触れた文をも含めた一覧表が現れる。閲覧者はそのうちの一つの画像マークをクリックすれば、文書が画像になって映し出される。そして印刷のバーをクリックすれば、必要な個所が印刷されて出てくる。よくぞこれだけ膨大な史料群のデータ処理をかくも短時間に仕上げたものだと思ふ。明清檔案と呼ばれる手書きの行政文書は現在、総数三一万件、このうち整理が終わったものは件ごとに紙製ケースに保管されてデータベース化されており、未整理のものも逐次作業が進められている。

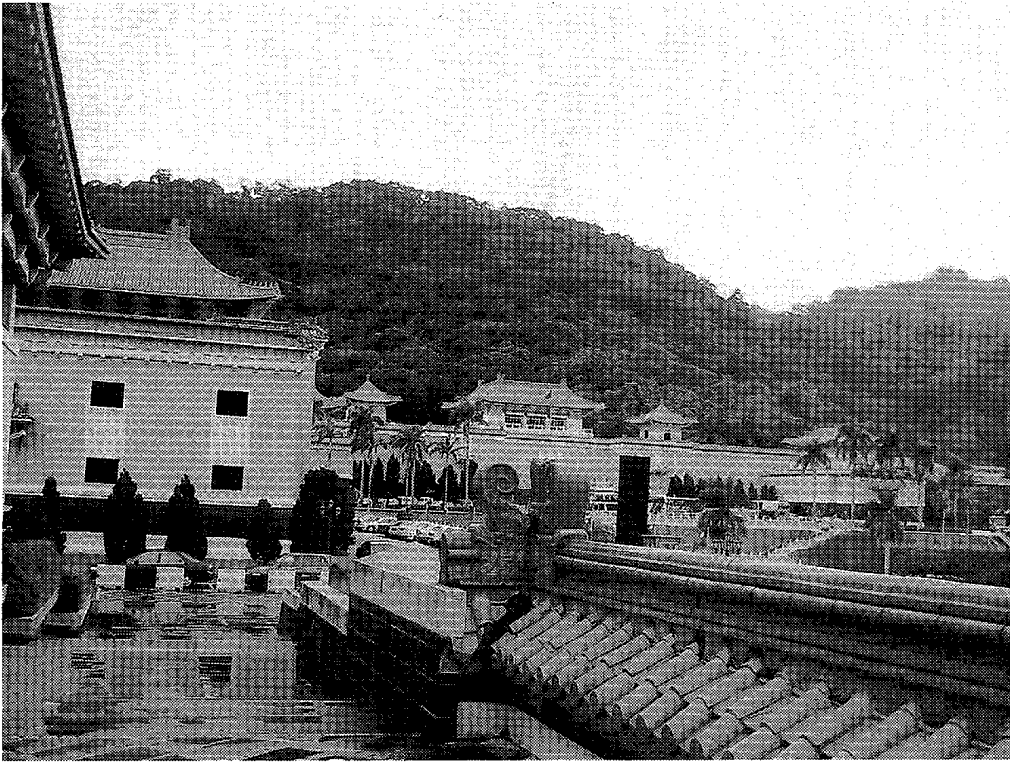
なお、台湾の研究機関によるデータベース化の状況は、堀地明「台湾における清代檔案史料のデータベース化とその利用」(『東方』二六五号、二〇〇三年)に詳しい。

(二〇〇二年一二月現在)

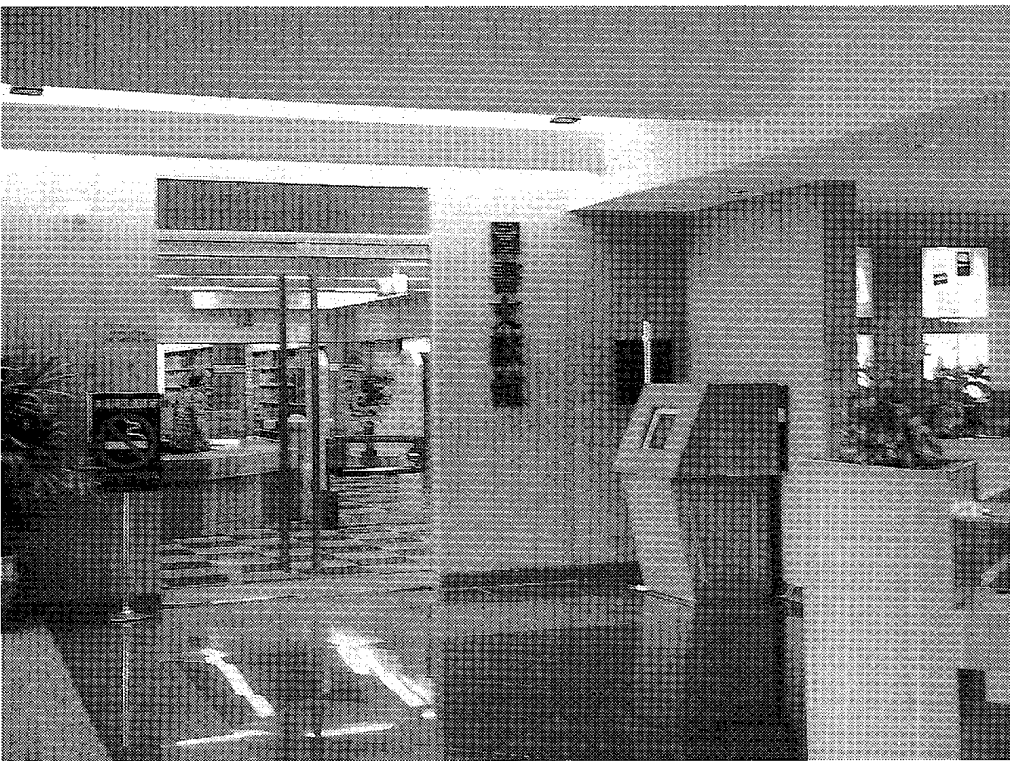
Ⅱ【国立故宮博物院圖書文獻館善本室】士林区至善路
<http://www.npm.gov.tw>

一九四九年、国民党は日中戦争で疎開させていた故宮博物院の文物を改めて二〇四函に詰めて台湾に移管した。それらはまず台北市郊外の霧峰北溝の収められたのち、一九六五年に現在の士林地区に移転させられたという。このなかには宮中檔(大部分は漢文朱批奏摺)、軍機処檔、内閣部院檔案、国史館及び清史館檔など四〇万余件が含まれていた。その全貌については国立故宮博物院編『国立故宮博物院清代文獻檔案書目』(一九八二年)や『国立故宮博物院善本旧籍書目』(一九八三年)で知ることがができる。

圖書文獻館善本室はこうして大陸から搬入された膨大な文書を所蔵している。現在そのなかで『宮中檔』と『軍機処録副』という二つの文書群の整理が完了している。『宮中檔』はカード検索が、『軍機処録副』は電脳に



台北・故京博物院



故宫博物院圖書文獻館

よるキーワード検索が完備している。館員にパスワードを打ち込んでもらえば、後は自由に検索できる。入力方法は注音字母という台湾独自の表記によるため、慣れないと一苦労であるが、文献のリストが即座に現れ、必要とあれば、その写真が画像で見られる。文書番号で申請すれば、文書ケーブルに乗って文書のコピーが運ばれてくる（現在はケーブルは使用されていないという——西英昭氏の教示による）。それをコピーしたいといえ、即刻一枚台幣三元でやってくれる。善本室以外のものはプリペイドカードを台幣一二〇元で購入して、後は自分で勝手にやればよい。こちらは台幣二元である。

なお当館の収蔵文献とその検索についての情報は、堀地前掲論文に詳しい。

（二〇〇二年一二月現在）

Ⅲ 【国家図書館善本室】 台北市中山南路 <http://www.ncl.edu.tw/>

国家図書館は、一九三三年に南京に創設が準備された国立中央図書館がその前身であり、一九五四年に台北に再建され、一九八六年に現在の場所に移転した。国家図書館の名称は一九九六年より始まる。「漢学研究中心」



国家図書館

はここに置かれている。

善本室の利用手続 収蔵善本は約一万二〇〇〇部、一二万六〇〇〇冊、普通線装本一一万冊に及び、うち明版が六〇〇〇部ある。国家図書館の善本室は四階にある。開館時間は日月を除く毎日九・〇〇―一七・〇〇であり、文献は九・〇〇―一・三〇と一三・三〇―一六・三〇に閲覧できる。立派な家具が調度されており、木製の書架は重厚さを増している。もちろん電腦検索も充実している。こちらの方はマイクロリーダーに印刷機がついていて、欲しいときにいつでも印刷ボタンを押せばよいことになっている。同館の漢学中心には東洋文庫や内閣文庫の稀覯書のコピーがそろっており、写真を頼むよりはるかに安い。故宮文献館と国家図書館は臨時閲覧証であればパスポートだけで発行してくれるので、紹介状や写真は不要である。

(二〇〇一年四月現在)

IV 【国立台湾大学中央図書館特蔵組】 台北市羅斯福路

<http://www.lib.ntu.edu.tw/>

台湾大学は市内の南、公館にある台湾最大の国立大学で、植民地時代の日本の台北帝国大学を継承したもので



国立台湾大学中央図書館

ある。正門から伸びるメインストリートの両脇に植えられた椰子の並木が南国の大学を印象づけるが、キャンパスの雰囲気は日本の旧帝大のそれによく似ている。正門は新制になってから新しく作ったものだが、昔の写真をみると極めてよく似ている。学生の雰囲気も日本の国立大生を感じがする。

中央図書館は最近新築された。これはまた台北帝国大学図書館の蔵書を継承している。このうちの古籍については五階にある特蔵組が管理しており、『淡新檔案』や『琉球歴代宝案』などの文書もその管轄である。検索においてはすべてが電腦で一括管理されている。また、台湾大学が独自に所有する貴重な文献の電腦入力も進んでいる。ただし、特蔵組には昔のカード目録がまだ存在しており、古籍検索には一定の役割を果たしている。

なお、台湾における包括的な文献情報については、西英昭「台北における図書館・文献検索情報―入門編―」（『法史学研究会会報』七号、二〇〇二年）を参考にされたい。

（二〇〇二年三月現在）

おわりに

総じて言えば、近年大陸では情報公開が進み、閲覧システムも一〇年前に比べても隔世の感があるほど便利なものになった。しかし、そうはいってもこのシステムのなかに中国の伝統社会の「人際関係」が色濃く残存していることも否定できない。外国の機関の紹介状はあまり意味を持たず、中国国内機関の紹介状を求めることが多いこと、いくつかの部局を通さなければ閲覧の許可が下りず、不必要な時間を要すること、「百通の紹介状より一人の知り合い」といった人と人との関係に基づいて閲覧許可の可否が決定されることなど、なお多くの問題を残している。これは近年台湾の歴史文献収蔵機関と全く対照的といってよい。大陸でも上海図書館など一部の機関では意識的に改革を進めているが、まだ少数派であることを否定できない。

この状況が当分変わらないまま、外国人が中国の歴史文献収蔵機関を快適に利用しようとすれば、どうすればよいか。少なくとも中国国内の機関、ないしはその機関に属し、その機関の公印を捺した紹介状を気軽に発行してくれる研究者を友人に持つこと、また閲覧を必要とす

る収蔵機関には定期的に出向き、受付の担当者に自分が何者であるかを個人的に記憶させ、その記憶を持続させることが必要である。中国では、その人が誰であるかを覚えていることを「認識」というが、その「認識関係」によつていろいろな交渉が成り立っていることをゆめ忘れてはならない。

以上、本稿では、筆者が近年北京、江南、台湾の各中国歴史文献収蔵機関において直接知りえた範囲のなかで、その情報を紹介した。冒頭でも記したように、近年の中国（台湾をも含めて）の図書館利用状況は毎年変化しているため、ここではとりあえず現況を書き留めた。

本稿作成に当たり佐藤仁史氏から多大な協力を受け、また、同「学術リソースレビュー・中国近現代史」(『漢字文献情報処理研究』四号、好文出版、二〇〇三年)も参考にさせていただいた。本稿に収録した写真の大半は筆者が直接撮影したものであるが、復旦大学図書館、華東師範大学図書館、故宫博物院図書館文献館・国家図書館のものについては、それぞれ佐藤仁史氏、福士由紀氏、江川和子氏から借用させていただいた。また、中央研究院近代史研究所の写真は同所発行の絵葉書から転載した。なお、本稿は本誌収録に先立ち、東京大学東洋文化研

究所のホームページ「アジア研究情報ゲートウェイ」
〈図書館・文書館ガイド〉<http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/guide/china/>に掲載している。